

[特集]

「あこがれの『団地』 ～高度成長とベッドタウン横浜～」展 —相鉄の住宅地パンフレット—



ご自由にお持ちください



[展示余話]

山下臨港鉄道と景観問題 —高度成長期に語られた「都市美」—

[聞き書き]

電話局の屋上から

～回想・戦中戦後の横浜中央電話局～

横浜都市発展記念館

HAMA NEWSLETTER 第23号 2014(平成26)年10月1日発行(年2回発行・不定期)
編集/横浜都市発展記念館 発行/公益財団法人横浜都市ふさぎ歴史財団 〒223-0021 横浜市中区日本大通12 TEL.045(663)2424 FAX.045(663)2453
電子ロコ/高橋健介 印刷・製本/株式会社 佐藤印刷所 本誌からの無断転載を禁止します。

EXHIBITION

特別展のご案内



オリンピックから半世紀

あこがれの「団地」

～高度成長とベッドタウン横浜～

高度経済成長期、横浜市内には多数の住宅団地が建設され、都市の姿と市民の生活は大きく変化していきました。この特別展では「団地」をテーマにして、高度成長を迎えた横浜のあゆみをふりかえります。

【会期】2014(平成26)年10月11日(土)
～ 2015(平成27)年1月12日(月・祝)

【関連展示】写真パネル展「洋光台43年の今昔物語」*観覧無料
10月25日(土)～11月21日(金)および12月13日(土)～1月12日(月・祝)
【協力】「ルネッサンス in 洋光台」今昔フォトコンテスト実行委員会、UR都市機構、神奈川県、横浜市、磯子区
【図録】「あこがれの「団地」～高度成長とベッドタウン横浜～」
横浜都市発展記念館/編

お知らせ

大好評につき、再版いたしました。 横浜都市発展記念館/編

横浜にチンチン電車が走った時代 —まちの主役!路面電車—

一部図版を追加して販売再開いたしました。
横浜のまちから市電が消えて約40年。前身の横浜電気鉄道の時代から、横浜の路面電車の歴史をふりかえります。



定価 1,429円 + 税

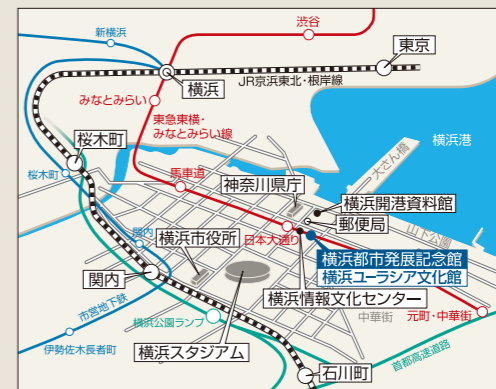
当館1階ミュージアムショップ、または通販でお買い求めください。



●表紙写真
夏休みのラジオ体操(洋光台)
1972(昭和47)年
神奈川新聞社提供

横浜都市発展記念館 利用案内

- 開館時間
午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)
- 休館日
毎週月曜日・年末年始ほか
(月曜日が祝日の場合は開館、翌火曜日に休館します。)
- 入館料
上記特別展開催期間
特別展 一般300円 小・中学生150円
(特別展の入館券で常設展もご覧いただけます。)
常設展のみ 一般200円 小・中学生100円
それ以外の期間
常設展のみ 一般200円 小・中学生100円
- 毎週土曜日は小・中・高校生無料
- 「濱ともカード」「敬老特別乗車証」「障害者手帳」「愛の手帳(療育手帳)」などをお持ちの方は、無料です。
- ホームページ
<http://www.tohatsu.city.yokohama.jp/>



交通アクセス

- 東急東横・みなとみらい線日本大通り駅(3番出口)0分
- 横浜市営地下鉄関内駅(1番出口)から徒歩約10分
- JR京浜東北・根岸線関内駅(南口)から徒歩約10分
- 横浜市営バス「日本大通り駅東庁前」下車徒歩1分
- あかいくつバス「日本大通り」下車徒歩1分

MUSEUM SHOP

ミュージアム・ショップより

刊行物

- ①『「写真記者」五十嵐英壽が見つめた港の半世紀』
横浜都市発展記念館/編 定価750円+税
- ②『港をめぐる二都物語 江戸東京と横浜』
横浜都市発展記念館・横浜開港資料館/編 定価1,000円+税
- ③『関東大震災90周年 関東大震災と横浜』
横浜都市発展記念館・横浜開港資料館/編
横浜市史資料室/協力 定価1,143円+税
- 『目で見る「都市横浜」のあゆみ』
横浜都市発展記念館/編 定価1,239円+税
- DVD
『映像でたどる昭和の横浜』シリーズ
第1巻・港とまちづくり 第2巻・都市の交通 第3巻・子どもたち
定価各1,429円+税



①「写真記者」五十嵐英壽が見つめた港の半世紀



② 港をめぐる二都物語



③ 関東大震災と横浜

※本誌は当館ホームページでもご覧いただけます。



編集後記

団地といえば…最近ではアニメがすぐに思い浮かぶ。原作者がK団地出身というのはなんだかとても身近な感じ。自分がこどもの頃近くにあったのはD公社の社宅。建物は遠くからでもすぐに見つけることができ、ランドマーク的な役割も果たしていた。今はその跡地には戸建ての家が建てられこれもまた一種の団地という集合体を成している。団地萌えなんていうものもあるらしい。この秋の特別展は団地です。(長)

◎次号発行予定 平成27年4月頃



「あこがれの『団地』」 高度成長とベッドタウン横浜」展

相鉄の住宅地パンフレット



①「住宅金融公庫法による計画建売住宅御購入要領 希望ヶ丘・釜台」
昭和30(1955)年



②「万騎が原」(住宅購入案内)
昭和35(1960)年



③万騎が原地の建売住宅
昭和37(1962)年頃
相鉄ビジネスサービス株式会社提供写真



④「相鉄の公庫住宅/白根8FG」 昭和38(1963)年



⑤「希望ヶ丘住宅地」(土地分譲案内)
昭和32(1957)年



⑥「楽老峰高級住宅地」(土地分譲案内)
昭和33(1958)年



⑦「DELUX住宅(万騎が原)」(本文)
昭和39(1964)年

*①、②、④～⑦はいずれも相模鉄道株式会社発行、相鉄不動産株式会社所蔵。

相模鉄道は、戦前の神中鉄道から引き継いだ横浜・海老名間の線路をもとに、昭和22(1947)年、事業を自立させ再スタートを切った。戦後すぐに希望ヶ丘駅周辺など、沿線の開発に着手するが、特に活発に横浜市内での住宅地開発を展開したのは昭和30年代である。

その中心となったのは、住宅金融公庫法にもとづく建売住宅である。公庫建売住宅とは、購入者が公庫から融資を受けることができるものだが、その建設は公共団体と、鉄道会社などの認められた民間企業に限られた。当初、相模鉄道は東京都内に路線を持たないため、認められていなかった

が、昭和30(1955)年よりその建設が承認された。まずは釜台(保土ヶ谷区)と希望ヶ丘(保土ヶ谷区。現旭区)の団地を手がけ、昭和30年代を通じて、希望ヶ丘に加えて万騎が原、楽老峰、白根(いずれも保土ヶ谷区。現旭区)などを中心に、複数年にわたって公庫建売住宅の販売を行っていた。特に神奈川県と共同で開発した万騎が原地は、沿線随一の大規模住宅地である。万騎が原では土地の分譲は行わなかったが、それ以外の地区では一般の住宅地の分譲もあわせて行っている。中には「既に東京の郊外といえる」「高級住宅地」といった宣伝文句が見られる。なお、

東京オリンピックと東海道新幹線の開業。日本の高度経済成長を象徴する二つの大イベントから今年でちょうど半世紀が過ぎる。高度成長期には、地方から大都市へ、とりわけ首都の東京へ多くの人口が集中した。その居住地は近県へ広がり、横浜市内でも農地や山林の宅地化が急激に進行した。横浜は東京のベッドタウン(住宅都市)という特性を強く持つことになる。

横浜という都市は、幕末・明治期に港湾都市かつ国際貿易都市として成長し、大正から昭和戦前期には重工業都市として発展、日本を代表する六大都市の一つとなった。ただ、横浜の市域は広大で、農地や山林も多く含まれていた。高度成長期にこれら郊外の地域が宅地化されて、東京から膨大な数の夜間(居住)人口が流入したのである。横浜市は日本最多の人口を有する市となるが、それは日本最大のベッドタウンとなつたためでもあった。

そして、高度成長期に郊外に開発された住宅地を象徴するのが、鉄筋コンクリートの集合住宅から成るいわゆる「団地」である。この特別展では、郊外の「団地」を中心に、高度成長の時代の都市横浜をふりかえっている。さて、そもそも「団地」とは、「一団の土地」、つまり、ひとまとまりの土地を意味する。団地に建設されるのは、集合住宅(アパート)に限らず、戸建ての住宅もあれば、工場や倉庫、農園の場合もある。しかし、集合住宅を建てた団地

が全国各地につくられ、最も広く普及したため、やがて「団地」＝鉄筋コンクリートの中高層の集合住宅、という意味で使われることも多くなつていった。

特別展では、公団・公社等によるいわゆる狭義の「団地」を中心としたが、本ページでは戸建ての住宅団地に焦点を当ててみたいと思う。それらも広い意味での「団地」であり、実際に「○○団地」という呼び方がされることは多々ある。特に今回の特別展では、相模鉄道によって開発された沿線の住宅地について、多くのパンフレット類を同社グループより提供していただいた。展示図録に多くを掲載することができたので、その図版をここで追加して紹介しておきたいと思う。

(岡田直)

山下臨港鉄道と景観問題 ―高度成長期に語られた「都市美」―



写真1 開通当日の山下臨港鉄道
昭和40(1965)年7月1日 五十嵐英壽氏撮影寄贈・当館所蔵

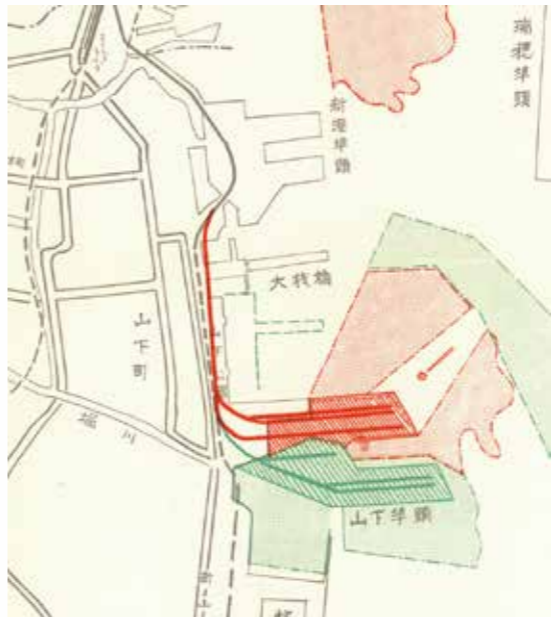


図1 臨港鉄道計画図
『横浜国際港都建設総合基幹計画書』(昭和32年)所収「港湾施設並びに臨港鉄道及び臨海工業地帯造成計画図」より 当館所蔵
赤と緑のラインが山下埠頭へと至る貨物線。平行して黒い点線が記されているように、当初は海岸沿いに本牧・根岸の埋立地を経由して、最終的に大船まで貨物線を伸ばす計画であった。

7月19日(土)から9月23日(火・祝)にかけて開催した五十嵐英壽写真展「『写真記者』が見つめた港の半世紀」のなかから、本稿では、昭和40(1965)年に開通した山下臨港鉄道(写真1)を取り上げ、この貨物線の建設が引き起こした景観問題とその顛末について紹介したい。

■山下公園を横切る臨港鉄道

終戦後、港湾施設のほとんどが米軍に接収された横浜港では、代替施設の建設が大きな課題であった。昭和28(1953)年12月、今なお接収が続いている瑞穂埠頭の代替施設として、山下公園の東側の海面を埋め立てて山下埠頭の造成工事が始まったが、この山下埠頭の建設は、臨海公園である山下公園に大きな問題をもたらした。

公園内を高架の貨物線が横断することになったからである。

この貨物線は、新港埠頭(現在の赤レンガパーク)とあらたに完成する山下埠頭とをつなぐ輸送ルートとして計画されたもので、昭和32(1957)年に横浜市が発表した『横浜国際港都建設総合基幹計画書』では、新港橋の脇から大栈橋のたもとを通り、山下公園内を通過して山下埠頭へ至るルートが検討されている(図1)。計画書では、「大栈橋入口を平面交差して」山下公園内を通る、すなわち高架ではなく地表面に鉄道が建設されることになっていった。大栈橋はすでに昭和27(1952)年に接収解除されており、多くの観光客を集めていたはずであるが、「跨線橋の建設は立地的に困難」で、貨物線の「運行が僅少であり、大した支障が

ない」との見通しが記されている。

しかし、開港100周年を迎えて、昭和34(1959)年度からスタートした4カ年の港湾整備計画では、貨物線は高架へと変更になり、大栈橋入口を立体交差として山下公園を横断するルートが発表された(『神奈川新聞』昭和34年1月6日、以下日付を記したものは同紙による)。

■大佛次郎による批判

山下公園内に高架で貨物線を建設するという計画には、公園の美観という観点から反対の声が次々と上がった。その代表格が作家の大佛次郎である。

大佛は『神奈川新聞』に連載していたコラム「ちいさい隅」のなかで、「港湾局は都市の美観など考えて仕事はしてくれぬ。出来るだけ抵抗の

おり、この拡張計画は未完のまま終わったようである。

■時代の皮肉

昭和40(1965)年7月1日、開通式の様子を撮影した五十嵐英壽氏は、のちに時代の皮肉をこう指摘している。「ちょうどこの頃から日本中でモーターリゼーションが進行しました」(『いまも百舟百千舟』より)。

高度成長の時代は、高速道路をはじめとする道路整備の時代でもあった。加えて昭和40年代に入って、貨物のコンテナ化が進むことで、鉄道による貨物輸送の需要は減り、山下臨港鉄道の貨物取扱量も昭和45(1970)年をピーク

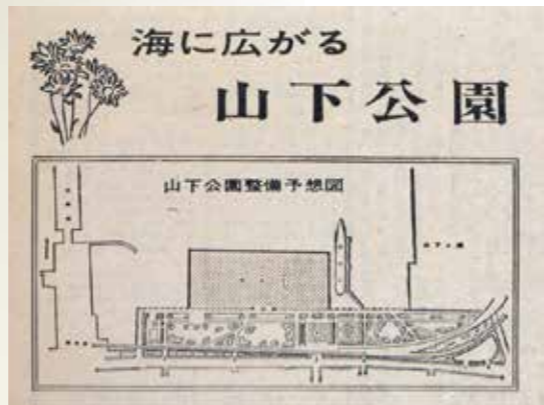


図2 山下公園の拡張整備予想図
『広報よこはま』第182号(昭和39年4月)横浜市中央図書館所蔵

ない経済的な場所に、最短の距離に、定規をあてたのである。(同年1月13日)と、この高架線計画に厳しい言葉を投げつけた。「コンクリートの目隠しの垣根」という表現を使っていることから、大佛は長大なコンクリート壁が公園の中に建てられるイメージを描いていたのである。

田中祥夫氏が著書『ヨコハマ公園物語』で指摘しているように、大佛はただ反対するのではなく、国鉄根岸線のルートを利用して途中で分岐させる案など、同時に対案も提示している。加えて注目したいのは、都市の美観を論

ずるなかで、横浜には自然の美はないが「日本大通りや海岸公園を人工の力で美しく築き上げて来た」として、だからこそ「都市としての美について、心を労さねばならぬ」と述べている点である。「都市美」という概念自体は戦前から都市計画の分野で提唱されており、決して目新しい話題ではないものの、横浜の景観問題を人工物の調整にあるとした大佛の指摘は、現在の都市デザインにつながるものとして注目に値する。

■まぼろしの公園拡張計画

賛否両論が出るなかで、最終的に市港湾局は「技術的にみて高架方式以外にあり得ない」という結論を出した(同年5月7日)。大佛が提案した国鉄根岸線を併用する案は「国鉄側に一笑に付された」という(同年5月18日)。ただし、景観への配慮として、高架の構造は大佛が想像していたような壁ではなく、コンクリートの柱が7.5mの等間隔にならぶ形となった。



写真2 税関前を通る臨港鉄道
昭和40(1965)年7月1日 五十嵐英壽氏撮影寄贈・当館所蔵



写真3 遊歩道として活用されている貨物線跡
平成26(2014)年8月撮影

(青木 祐介)

電話局の屋上から ～ 回想・戦中戦後の横浜中央電話局 ～



① 鶴見すみ子さん
昭和18年 鶴見すみ子さん所蔵
電話局近辺の「中村」という写真館で撮影した。



② 鶴見すみさんが持っていた証明書
昭和18年 鶴見すみ子さん寄贈 当館所蔵
空襲の際にとっさに持ち出した数少ないお品のひとつ。
(画像を一部改変しています)

証明書を携帯して通勤した。
東京の空襲がたびたび電話局にも
伝えられていたころのことというか
ら、昭和19年末から昭和20年の前半
だろうか。夜勤の休憩時間にすみ子
さんは一人屋上にのぼった。暗くひ
ろがる空のはるか北の方が、真っ赤
に染まっている。米軍の空襲で焼か
れている家々の炎が空に照り返して
いるのだ。蒲田の方だろうか。炎の
下で逃げまどう人のことを想像して
すみさんは悲しい思いにとらわれ
た。

屋上からみた戦火

鶴見(旧姓豊田)すみさんは昭和

2年生まれ。戦前は神奈川区白幡南町
に住んでおり、昭和16年横浜中央電
話局に電話交換手として採用された。

電話局の勤務時間は日勤は午前9時
から午後6時までだが、夜勤は午後4
時に出勤して途中仮眠をはさんで午前
8時までの勤務である。夜勤明けには
伊勢佐木町であんみつを食べるのが楽
しみだったという。昭和18年ころから
中央電話局の周辺は立ち入りが厳しく
なり、すみさんは電話局が発行する

横浜大空襲

昭和20年5月28日、横浜大空襲の
前日。すみさんは夜勤のため午後
4時に出勤し、日勤者と交替し交換
台に着いた。29日明け方、空襲警報
が入り、いったん部長の指示で地下
に避難。危険が去ったため各自部署
に戻り、午前8時日勤者と交替して
勤務を終えた。局を出た時は晴天だっ
た。

すみさんは白幡の家に戻り、朝
食の雑炊を食べはじめた。そのとき、

本誌第16号(2011年10月発行)
に「昭和はじめの横浜中央電話局」と
題して、当館の建物の前身である横浜
中央電話局に戦中お勤めだった方の回
想などから、当時の電話局と交換手の
生活のひとつまを紹介した。その後、
やはり戦中・戦後に電話局にお勤め
だったふたりの女性が別々に当館を訪
れ、おふたりとも屋上に出ることを希
望された。

当館は昭和4(1929)年に建て
られた4階建てのビルである。現在の
横浜都心部では背が低いため、屋上に
あがってもまわりのビルに阻まれ眺望

はきかない。のみならず空調設備の配
管が設置されているため騒々しく、ふ
だん想う職員もいない。
少々いぶかしく思いながらも、特段
のご事情からご案内したところ、おふ
たりから思いもよらず戦中戦後の電話
局の屋上にまつわるエピソードをうか
がうことになり、くわえて貴重な資料
までご寄贈・ご提供いただけることにな
った。
ここでは第16号の続編として、当館
の大先輩ともいべきおふたりの回想
談と資料から、戦中・戦後の電話局の
ようすを紹介したい。

東の上空から異常な轟音を聞く。身の
危険を感じてとっさに玄関に飛び降
り、靴を手づかみにして防空壕に飛び
込んだ。その後、頭上から爆撃の音
が聞こえた。ひたすら息をひそめて時
間がたつのを待った。静かになって防
空壕のムシロをめくると煙が立ちこめ
ている。自宅は全焼。身につけていた
通行証と数葉の写真以外のすべてを
失った。

日に横浜駅から父の実家の静岡県を目
指して出発、そこで終戦を迎える。戦
後疎開先で結婚し、横浜に戻ることは
なかった。70年近い歳月を経てすみ子
さんが当館の屋上にのぼったとき、
まさきき思い出した光景は、真っ赤
に染まる戦火の空だったという。

遊び場だった屋上

平綿(旧姓堀越)春枝さんは、昭和
5年生まれ。保土ヶ谷の元久保町に家
があり、昭和19年4月から横浜中央電

話局で勤めをはじめた。昭和20年5月
23日、自宅に焼夷弾が直撃、春枝さん
もけがを負い昭和21年まで休職。復職
して昭和27年まで久里浜から電話局に
通勤した。
春枝さんも当館の屋上を印象深く記
憶されている。まだ若い春枝さんたち
にとって屋上は短い休み時間の恰好の
遊び場だった。屋上から落ちないよう
に設置されている腰壁の上に、冒険心
からのぼって叱られたこともあった
し、大栈橋の客船が出港する際、乗客
が投げる華やかなテープの橋を見物す
ることもあったという。春枝さんに
とって屋上は学校の校庭のようなもの
であったのだろうか。写真は昭和22
23年ころ屋上で撮られたものだが、戦
後の自由な「空気」までも伝わって
くるようだ。



③ 中央電話局の屋上で 昭和22～23年 平綿春枝さん所蔵
電話局の同僚らと撮影したもの。右から2人目が春枝さん。



④ 屋上から見る海
昭和22～23年 平綿春枝さん所蔵
当時電話局のまわりには背の高い建物がなく、
海がよく見渡せた。

*当館の屋上は非公開です。



⑤ 現在の当館屋上

現在では職員もほとんど立ち入るこ
とがない当館の屋上だが、電話局に勤
めていた女性たちにとっては、楽しい
記憶や悲しみがつまった思い出の場所
であった。そしてその思い出話には、
今の私たちにその時代の雰囲気があり
ありと伝えてくれる。お話をお聞かせ
いただいた鶴見すみ子さん、平綿春枝
さんに心よりお礼を申し上げます。
(吉崎 雅規)